

# 「けっこう」<sup>(1)</sup>の意味機能の多様性 ——漢語「結構」からの変容——

文学研究科日本文学文化専攻博士後期課程1年

張 琳

## 要旨

古代の日本語は中国から大量の漢語を輸入した。それらの漢語は受容された後、日本語の体系の変化とともに、意味・用法を変化させながら定着している。それゆえ、数多くの漢語は当然ながら、中国の原義と違った意味・用法を持っている。しかし、現代の日常生活で使用されるとき、現代語の辞書にも載っていなかったり整理して記載されていなかったりするために、明確な使用判断ができないものも少なくない。「結構」（「けっこう」）もその一例である。

本稿では、「けっこう」の意味・用法、および談話内における機能や語用論的な機能を究明するための準備段階として、先行文献の整理を行う。現代語の「けっこう」を分析対象とするが、必要に応じて、古典の先行文献やコーパスを利用する。

キーワード： 程度副詞「けっこう」 意味機能 多様性 変容 評価的意味

## 1 はじめに:問題の所在

ここでは、本研究で扱う「けっこう」に関する問題の所在を明らかにする。研究の中心となるのは、①形容動詞「けっこう」のプラスとマイナスの評価的意味の異同と「断り表現」となるメカニズム、②程度副詞「けっこう」が評価性を持つメカニズム、③談話の中で機能する誘導副詞や間投詞としての用法である。以下に例を挙げながら説明する。

- ① 形容動詞「けっこう」のプラスとマイナスの評価的意味の異同と「断り表現」となるメカニズムについて、

1. けっこうな品物です。

2. それはけっこうです。

(筆者作例)

1と2の意味を考えると、まったく逆の使い方がなされているかのように見える。1は対象を賞賛している表現で、2のほうは断りの時に使われる慣用的な表現である。「けっこうな品物です」は、いい意味にしか取れない言葉であるが、人から勧められた時に「けっこうです」といえば、「いない」という意味になる。このように、「けっこう」にはプラスの意味で使われる時とマイナスの意味で使われる時があるが、この二つの意味は同じレベルで同居しているのではない。プラスの意味としての「けっこう」から断り用法が派生しているのだと考えられる。このような意味機能と、「断り表現」となるメカニズムについて、第4節で考察する。

② 程度副詞「けっこう」が評価性を持つメカニズム

「けっこう」には以下のような程度副詞の用法がある。

3. 今日の宿題はけっこう多い。

4. この建物はけっこう立派だ。

5. うちの母が作った料理はけっこうおいしいよ。

(筆者作例)

3は宿題の量を修飾する例であり、4は建物のすばらしさの程度を修飾する表現である。5は料理のおいしさの程度を修飾しているわけだが、3と4よりも話題対象を評価するニュアンスを強く感じるのではないだろうか。3、4も文脈によっては評価するニュアンスが強くなることがある。すなわち、程度副詞「けっこう」は量や程度を修飾するだけでなく、評価性が内包されており、条件によって評価性が強く現れるようである。このような評価性が生まれるメカニズムはどのようなものであろうか。これについては第5節で考察する。

③ 談話の中で機能する誘導副詞や間投詞としての用法

「けっこう」が談話の流れの中で使われる時、程度副詞から拡大したような機能を持つことがある。

6. 私なんか、けっこう、貸した本を返してもらえなくて、困っているんだけど。

(筆者作例)

ここでの「けっこう」は、「困っている」の量や程度を限定したり、評価したりしているわけではなく、いわば、いいよどもみや間つなぎ的な役割を担っている。このような、程度副詞とはいえないような用法については、第6節で考察する。

以上のような問題に関しては、文法から語用論まで包含するような研究の視点が求められる。また、歴史的な変容についても踏まえておく必要がある。そこで、本稿では、以上の問題を整理しつつ、必要に応じて、以下のようなコーパスや『日本国語大辞典 第二版』（2000）のような辞書を参照しながら考察を進める。

「大系本文（日本古典文学・断本）データベース」

「現代書き言葉均衡コーパス・中納言」

「女性のことば・男性のことば（職場編） 自然談話テキストデータCD-ROM」

## 2 「けっこう」の語史的背景

### 2.1 漢語副詞の変化過程

前田（1983）は、漢語副詞一般を考察した論文であるが、漢語の品詞が日本語に受容された後、どのように変化したかを説明している。漢語は日本語に受容された最初期には、名詞として受け入れられることが多かった。その後、動詞になる場合、「注意する」「掃除する」「研究する」などのように、漢語サ変動詞として使用されている。漢語副詞について、前田（1983）は、「漢語副詞は体言性を失い国語化してくることによって副詞となったとも言えるのである」と述べている。

前田の議論からは、漢語が名詞からサ変動詞へ、名詞から形容動詞へ、形容動詞から副詞までの流れを経て変化してきたことがわかる。

### 2.2 「けっこう」の変化について

「けっこう」の意味・用法変化に関する語史研究には遠藤（1983）がある。遠藤（1983）は、漢語「結構」を通時的に考察し、意味変化の経過を探っている。漢文に見られる「結構」は本来、「家屋又は文章などを組み立てること。かまえ作ること。又そのさま」（遠藤1983:24）を意味するが、日本語に取り入れられてから、時代を経て、新たな意味・用法が出てきた。漢語「結構」の意味変化は、遠藤（1983）において次の六つにまとめられている。

- ① 建てることや建物を意味するが、立派な構想による規模の大きな、幾棟もの建物を指す。（名詞）
- ② 建物や文章でなく、心の中に「結び構える」企てやたくらみ、時に計画の意味を派生する。これは日本語の特有の意味である。（名詞）

- ③ 具体的なことについて、「準備・用意する」意味を示す。(漢語サ変動詞)
- ④ 連体修飾・連用修飾用法として用いられ、「すばらしい・立派である」という意味、プラス評価に対する拒否反応、「それでよろしい」「それ以上望まない」意味を持つ。(形容動詞)
- ⑤ 「かなりの」程度を意味するようになり、副詞用法を持つ。十二分とは言えないまでも十分に、といった意味である。(副詞)
- ⑥ 人に対する評価として、プラス評価とマイナス評価が見られる。(評価機能の変化、副詞)

(遠藤1983より筆者再整理)

以上の説明によれば、「結構」は日本に受容された後、①の意味に基づき、②～⑥の意味・用法が発生して使用されてきたということになる。①と②は名詞であり、本来の中国語における品詞と同じであるが、②の場合は①と比べて、「心の中に「結び構える」企てやたくらみ、時に計画の意味」という日本語の特有の意味が生じている。③から⑥までは、品詞としては、名詞ではなく、中国語にない漢語サ変動詞、形容動詞と副詞などの品詞が出てきて、意味も変わっている。また、これらの新しい意味用法は時代とともに盛んになり、今後、さらに多用されていくと指摘されている。

遠藤(1983)の研究は、後の「けっこう」に関する研究の重要なよりどころとなっている。しかし遠藤は、「結構」の意味変化と各意味が出現する文章、文体を提示し、品詞変化の様子を紹介しているものの、それぞれの意味の間にはいかなる関連性があるのか、名詞からどのような過程を経て形容動詞へ、形容動詞から副詞へと変わるのか、「けっこう」の各時代における使用状況はいかなるものであるかなどは説明していない。そこで本稿では、第3節から6節まで「けっこう」の使用状況の変化を考察する。

### 3 「けっこう」の名詞用法

前述のとおり、漢語「結構」は当初中国から輸入されたとき、中国語の“结构”と同じであり、名詞として使用された。本章では、中国の辞書や文献における“结构”の原義と日本語の「けっこう」の名詞用法のつながりを考察し、日本文献において、名詞「結構」の意味変化を検討する。

#### 3.1 中国文献における“结构”の原義

中国語辞書の一つである『辞海』(2010)では、“结构”について次のように説明されている( )内の日本語は筆者訳。以下同様)。

- ①文艺作品的组织方式和内部构造。(文艺作品の組み立てと内部構造)
- ②系统内各组成要素之间的相互联系, 相互作用的方式。(システム内の各要素の間における結びつき/働きかける方式)

(『辞海』2010)

『辞海』では、“结构”は「組み立て、構造、方式」などと意味付けされ、名詞であると解釈されている。もう一つの説得力のある辞書『現代汉语词典 第六版』(2012)では、さらに詳しく説明されている。

- ①<名詞>各个组成部分的搭配和排列。(各部分の組み合わせと配列)  
例:文章的结构;语言的结构
- ②<名詞>建筑物上承担重力或者外力的部分的构造。(建物における重力あるいは外力に耐えられる構造)  
例:砖木结构
- ③<動詞>组织安排(文字, 清洁等)。(構成する、手配する)  
例:根据主线来结构故事

(『現代汉语词典 第六版』2012)

『辞海』と異なり、『現代汉语词典 第六版』では、“结构”は品詞により分類されている。①と②の場合には、名詞として用いられるが、③では動詞の機能が認められている。しかし内省ではあるが、現代中国語では、“结构”の動詞の意味はあまり使われていない印象がある。また、中国の古典文献には、次のような例文がある。

7. 於是详察其栋宇, 观其结构。(汉王延寿《鲁灵光殿赋》)  
(そして綿密にその家屋を見て、家屋の構造を見る。)
8. 金陵陈氏园, 结构玲珑, 规模略小。(清黄钧宰《金壶浪墨·起蛟》)  
(金陵における陳氏の庭園は、様式が精巧で、広さが少し小さい。)
9. 结构圆备如篆法, 飘颻洒落如章草。(晋卫夫人《笔阵图》)  
(書かれた漢字の形は篆書のように丸く、章草のように自由奔放である。)

7は魯灵光殿の構造を見ることを、8は陳氏園という庭園の様式が精巧であることを表している。いずれも「建築物の様式、すばらしさ」という意味である。9は筆で書かれた漢字の形の仕組みを指す。これは具体的な物事から抽象的なものへ変わったということであり、中国語の“结构”の転義と言えるようである。しかし、中国辞典や文献にみられる“结构”は、「家

屋などの建築物の様式・構造、文章の仕組み」という意味であり、基本的に名詞として使われている。日本語における形容動詞や程度副詞用法は見られない。

### 3.2 日本文献における「けっこう」の名詞用法

ここでは、「けっこう」が受容された最初期、どのような意味・用法を持ったかを考察する。日本語における「けっこう」の早い例は、平安時代の作品に現れている。平安時代の漢文には、次のような例が見られる。

10. 而近代社司等、好立<sub>レ</sub>神領<sub>一</sub>、奪<sub>レ</sub>妨公田<sub>一</sub>、供<sub>レ</sub>最小之上分<sub>一</sub>、籠<sub>レ</sub>広博之四至<sub>一</sub>、結構之至、尤非<sub>レ</sub>穩便<sub>一</sub>。(『兵範記』)

(『日本国語大辞典 第二版』2000)

上記の「結構」は名詞であり、建物や建てることを意味し、中国語の原義と同じである。つまり、「けっこう」が日本に受容され始めた時には、名詞として用いられ、中国文献に見られる意味・用法を踏襲したものと考えられる。しかし、中世の「けっこう」には以下のように、当初の意味とは異なるものがみられる。

11. 此一門亡くすべき由、法皇の御結構こそ遺恨の次第なれ。(『平家物語』)

(「大系本文(日本古典文学・断本)データベース」)

11は建物の意味がなくなり、心の中である考えを作り構えること、計画、意図の意味を表している。ここでの「結構」は依然として名詞ではあるが、中国の文献における“结构”の原義と異なり、日本特有の抽象的な意味を持っている。また、名詞としての「けっこう」は「結構人」「結構者」などの単語を作っているが、これはよい意味で、「おめでたい人」「すぐれた人」を指していた。中世以降は、名詞としての「けっこう」の意味が原義から拡大したといえるだろう。

『日本国語大辞典 第二版』(2000)では、「けっこう」の名詞用法について以下の五つの説明がまとめられている。

- ①物をつくり出すこと。多くの場合、善美を尽くしてつくること。また、そうして出来上がったものやその構造。こしらえ。意匠。  
イ.家屋などの構築物についていう。  
ロ.抽象的なものごとや論理の構成など、イ以外のいろいろなものについていう。

- ②心の中で、ある考えを作りかまえること。計画。意図。企て。
- ③物事の準備をととのえること。用意。支度。
- ④実現すること。執行すること。
- ⑤ぜいたくをすること。

「大系本文（日本古典文学・断本）データベース」を見ると、「結構」の用例数延べ175例のうち、名詞用法の例は42例であり、全体の24%を占める。これらの例はすべて中世と近世の作品の中でみられるものである。この42例には、②の意味に当てはまるものが多いが、③の場合にはサ変動詞として使用される。中国文献における原義ともっとも近い意味①の例は少ない。これについて遠藤（1983）では、「「結構」は計画の意味から具体的な事についての準備・用意の意味へと変わるのである。用意と計画の差は、その内容が具体的に限定されているかいないかによると考えられるからである」と示されている。

「現代書き言葉均衡コーパス・中納言」では、「けっこう」が出てくる例は10052件であるが、その中には、名詞の例は次の3件あるのみである。

- 12. 全体の結構は、まず総論ともいうべき部分があり、そのあとにア行からワ行まで。  
(足立卷一『やちまた』)
- 13. 帝劇三演の「ラヴ哲学」一幕三場は、その点、首尾結構がととのっている。  
(高野正雄『喜劇の殿様』)
- 14. 楷書の用筆法・結構法（点や画の組み合わせ方）を学ぶことは、他の書体を書く場合  
(栗原蘆水ほか『書道I』)  
(「現代語書き言葉均衡コーパス・中納言」)

このように、「けっこう」の名詞用法は平安時代に漢語の輸入につれて使われ始め、中世と近世はかなり多くなったが、現代では少なくなってきたと考えられる。

#### 4 「けっこう」の形容動詞用法

中世に入ると、漢語「結構」は名詞で使用されると同時に、前代に見られなかった形容動詞の用法が出てきた。

- 15. これはなんじゃ、金欄・緞子・緞錦・綾・錦、豹の皮虎の皮、さてもさても結構な物じゃ。  
(『集狂言 磁石』)
- 16. たぶればたぶるほど結構なお茶でござる。もはやたべますまい。  
(『出家座頭狂言 薩摩守』)

17. ヤレヤレそれはありがたいことでござる。さだめて衣裳をも結構にこしらえて下さるる  
でござろう。(『鬼山伏狂言 髭槽』)

(「大系本文 (日本古典文学・断本) データベース」)

以上の例は「大系本文 (日本古典文学・断本) データベース」から抽出したものである。15は良質な織物であるということであり、16はお茶の品質が優れて、口当たりがいいということであり、17は衣裳を綺麗に作ってくれて、ありがたいということを表している。いずれも、前代の名詞の意味・用法ではなく、形容動詞として、連体修飾・連用修飾の働きを発揮し、「よく出来上がっているさま。優れているさま。立派なさま」の意味である。『日本国語大辞典 第二版』(2000) でみたように、「けっこう」の名詞用法には、「善美を尽くして作ること」という意味があり、建築物のすばらしさを表している。中世に入って、「けっこう」が連体修飾として立つ時は「立派な・豪勢な」と訳すことができ、形容動詞の形で名詞の意味を受け継いだといえる。「大系本文 (日本古典文学・断本) データベース」の中世の作品における「けっこう」の用例数は66例であるが、その中で、形容動詞の用法は48例あり、7割を上回る。近世の107例のうち、形容動詞は70例があり、6割強を占める。名詞用法とは異なり、形容動詞用法は現代語でも頻繁に使われている。次の例を見てみよう。

18. さすが有名な温泉地というだけあって、街は結構な賑わいを見せていた。

(渡瀬桂子『癒しの手のアルス』)

19. 食事の支度はけっこうな重労働だった。(畑守泰子『ナイルに生きる人びと』)

(「現代語書き言葉均衡コーパス・中納言」)

18は街の繁華の様子を、19は食事の支度の辛さを修飾している。形容動詞「けっこう」は時代の移り変わりに伴って、当初の意味から拡張し、新しい意味が生まれてきた。『日本国語大辞典 第二版』(2000) では、五つの意味に分類されている。ここでの例文は、各意味が使われ始めた最も早い例であるとされている。

結構 【形容動詞】(一)<sup>(2)</sup>の意から転じて。よく出来上がっているさま。申し分のないさま。よいさま。

①すぐれているさま。立派なさま。好ましいさま。

例: けっこうなものを着たがるは姪欲の心なり。(『六物図抄』1508)

②ねんごろなさま。手厚いさま。

例:此の詩は群臣の臣下どもよい賓客をあつめてけっこうにもてなし酒の肴をととのえて酒を飲み歌舞して楽しんだことを作たぞ。(『玉塵抄・六』1563)



③心がけがよいさま。気立のよいさま。好人物のさま。お人好し。

例:扱も扱も、結構なをちご様じゃ。けふも色々の物を皆貸させられた。

(『虎寛本狂言・止動方角』室町末一近世初)

④十分なさま。満足なさま。それでよいとみなされるさま。

例:お前も風を引かんかえ。結構結構。(尾崎紅葉『二人女房』1891)

⑤それ以上必要としないさま。丁寧に断る場合に用いる。

例:「お茶はいかがですか。」「結構です。」

『日本国語大辞典 第二版』(2000)の記述をもとに、形容動詞「けっこう」のそれぞれの意味と、それらが出てきた時代をまとめると、図1(次のページにある)のようになる。

形容動詞「けっこう」の最初の意味①と②は中世の作品に生まれ、名詞の原義「善美を尽くして出来上がったもの、すばらしさ」から転じたものである。①は具体的な物事に対する評価であるが、②は抽象的な事柄についてのプラス評価である。従って、「けっこう」が形容動詞として、「立派である」「優れている」「みごとだ」といった評価的にプラスの意を表す用法には、対象の属性を表す側面と発話者の評価を表す側面とがある(播磨2014)といえよう。この評価的な意味は中世の作品には多く見られる。例えば、

20. これは結構なお替え物ではござれども、先の者が、太刀を持たするほどの者でござらぬ  
よって、お太刀とはえ替えますまい。(『大名狂言・富士松』)

21. さてもさても結構な御酒でござる。(『出家座頭狂言・地蔵舞』)

(「大系本文(日本古典文学・断本)データベース」)

また、「けっこう」は近世においてもプラスの意味で使用されているが、物に対する評価ではなく、事柄に対する評価が現れている。例えば、

22. 道に違うた銀儲を結構な事と思ひをる。(『博多小女郎波枕』)

23. 是はけっこうな御挨拶でござりまする。(『波形本狂言・魚説法』)

(同上)

22と23は、具体的なものを指すのではなく、「事」「挨拶」のような事柄に評価をする例である。評価した対象は違うが、基本的な意味はあまり変わらない。

さらに、近代にかけて、「十分なさま、満足であるさま」の意味が出てきた。これは事態や状況に対する評価、物事や事柄の属性という客観的な評価ではなく、話し手の主観的な感情や考えである。この用法は絶対的な「すばらしさ、見事さ」ではなく、話し手が取る基準

に基づき、「十分で、満足である」とする相対的なプラス評価に用いられるものである。満足であるため、これ以上は必要としないと主張する場合、「けっこう」を使うと、断る意味を表すことになる。直接的に拒否する場合と比べ、「けっこう」の使い方はより丁寧で、相手のフェイスを脅かさなくてすむ。形容動詞「けっこう」のこの用法は、現代の言語生活の中でよく使われる。播磨（2014）は、「けっこう」の否定・辞退の意を示す応答用法について、次のように指摘している。

「～て（も）結構だ、～で（も）結構だ」は、相手からの申し出や進めを受け取りたくない際に、現状で十分であること、満足であることをその理由としてあげるものであり、「結構」自体に拒絶の意味があるわけではないが、断り表現の用法に連続するものである。

「けっこう」の断り表現は近代において「満足である」という意味から生じたものであると言えるようであり、マイナスなニュアンスが感じられる。遠藤（1983）は、「結構」の拒否反応はよい事を絶対視せず相対的に受け止める態度が働いておる。それが「結構」の意味変化の原因なのであろう」と指摘している。「けっこう」の断り表現は中国語の原義からはまったく考えられないような種類のものである。これは「けっこう」が日本語に受容された後のもっとも顕著な変容である。

次の節では、「けっこう」の程度副詞用法はいつごろから出現し、どのような特徴を持っているかを考察していく。

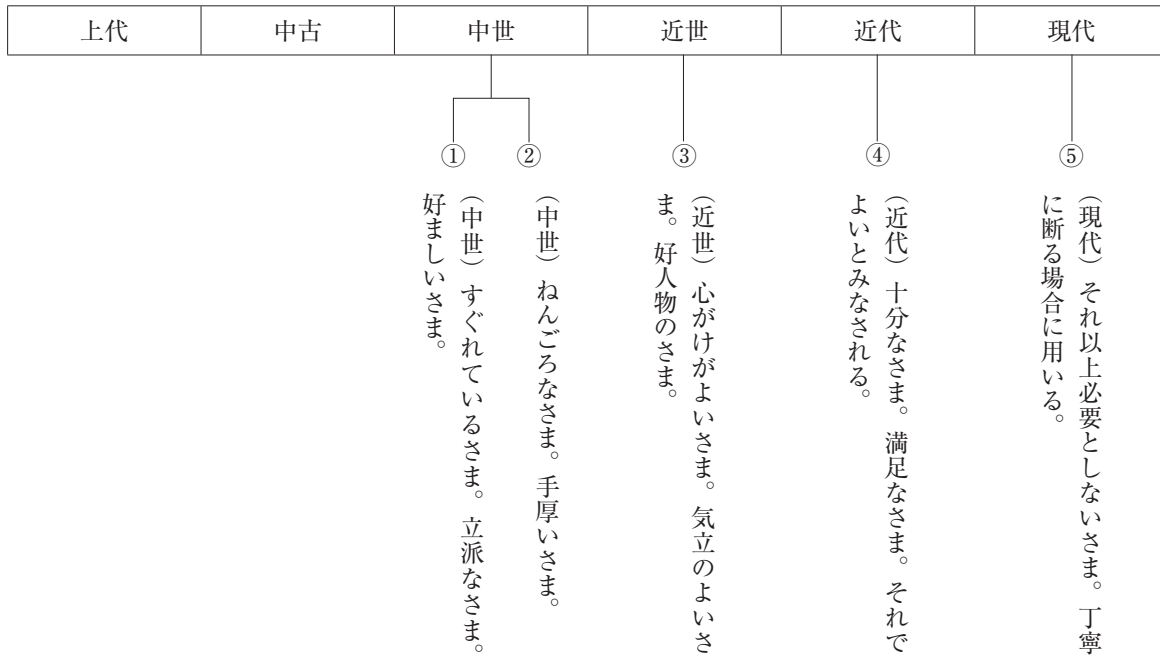


図1 「けっこう」の形容動詞用法の意味増殖

## 5 「けっこう」の程度副詞用法

近世になると、名詞と形容動詞用法とともに、動詞や形容詞に係る副詞用法が一定数見られるようになる。これらは現代語につながるものであると言える。以下のような例がある。

24. けっこう質を置んすとかわひがり。(『雑俳・柳筥 四』1783-86)

25. 『私のやうな、おてんばなぞんざい者は、御奉公が勤りさうもないね』

『ナニサ、それでもけっこう勤りますのさ』

(『滑稽本・浮世風呂三・下』1809-13)

(『日本国語大辞典 第二版』2000)

24と25の「けっこう」は名詞を修飾していないため、形容動詞として扱うわけにはいかない。24は「かわひがり」を、25は「勤まる」をそれぞれ修飾しており、程度副詞の用法と言える。ここでは、程度副詞の意味用法の変化と評価性を帯びるメカニズムについてみていく。

### 5.1 程度副詞「けっこう」の2つの意味

まず、程度副詞の基本的な意味について、『日本国語大辞典 第二版』(2000)を参照してみよう。ここでは、「けっこう」は程度副詞として、「十分満足であると言うほどではないが、一応よいと言えるさまをいう。程度が低いと見込んでいた予想からは、案外程度が高いことを表す。かなり。」の意味を持つと説明されている。ただし、この解釈の前半——「十分満足であると言うほどではないが、一応よいと言えるさまをいう」は、物事や事柄に対して心から十分に満足しているわけではなく、何らかの理由で、仕方がなく、無理にプラス評価をするといったニュアンスを暗示している。解釈の後半——「程度が低いと見込んでいた予想からは、案外程度が高いことを表す」は、発話者の思ったより高い程度に達して、驚いた感じが現れるとともに、もともと程度の低い予想をしていたことを暗示している。『日本国語大辞典 第二版』の解釈の前半部と後半部は違うことを意味しているので、別の意味として扱われるべきではないだろうか。そこで、程度副詞「けっこう」の意味を、①「十分満足であると言うほどではないが、一応よいと言えるさまをいう」と②「程度が低いと見込んでいた予想からは、案外程度が高いことを表す」という二つに分けて考えることとする。以降、前者を「意味①」、後者を「意味②」と省略して示す。

「けっこう」の程度副詞用法の例文を考察してみると、一つだけの意味に対応する場合と二つの意味に対応する場合とがある。

26. 今度の試験は結構いいところまでいくかもしれない。(『明鏡国語辞典』)

27. 決して威張れない人なんだ。それで結構つよい半面もあつて、學問上の議論となると、

なかなか譲らない。(太宰治『知らない人』)

26は「試験の結果のよさ」の程度、27は「人の強さ」の程度が高いことを表している。しかし、26は文脈がないため、「けっこう」が修飾する「結果のよさ」の程度は意味①でも意味②でも説明できる。意味①の場合では、試験に満点を取るのとは一番満足できることであるが、今度の試験に満点を取れなくても、90点以上、あるいは前回より高い点数が取れば、一応喜ばしいことであるという意味になる。また、意味②の場合では、試験でいい点数が取れるかどうかには自信がなかったが、解答を見た後、自分の回答の正確率が案外にも予想より高くなることに気がついたという意味になる。27の「けっこう」は、文の前後関係を考えて、意味②のみ持っているといえそうだ。ここに抜粋した文脈からだけでは、「決して威張れない人なんだ」がプラス評価かマイナス評価かは断定できない。しかし「頑張ることや主張することをしない人物は一般的に優しい／弱い」といった考え方が暗黙のうちに共有されており、たとえこのような優しい／弱い人であっても、学問の議論となると案外強い半面を表出するというのである。学問上の議論の際に見せる主張の強さの程度が予想した以上であることが示されている。ここでは、意味①の「十分満足であると言うほどではないが、一応よいと言えるさまをいう」といった意味には取りにくい。

以上をまとめると、程度副詞「けっこう」は「十分満足であると言うほどではないが、一応よいと言えるさまをいう」場合と、「程度が低いと見込んでいた予想からは、案外程度が高いことを表す」場合があり、程度性を表す以外に、対象に対する評価や予想なども暗示すると言えるであろう。

工藤（1983）では、程度副詞の周地的・過渡的なものを八つの種類に分けているが、評価性はその一つとして認められている。また、鳴海（2013）においても、程度的意味発生の過程の中に評価性が位置づけられている。

鳴海（2013）は、副詞における程度的意味発生の過程には以下の四つのパターンがあると指摘している。すなわち、副詞に共通する変化として、基本的には量的意味から程度的意味へ、程度的意味から評価性へという変化の過程を辿るというのである。

①量的意味から程度的意味へ

②「真実性」の意味をもとに、評価的意味が程度（度合強調）性を帯びる

③「比較性」の意味をもとに、評価的意味が程度性を帯びる

④程度的意味が評価性を帯びる

（鳴海2013:108 下線筆者）

この鳴海の変化過程説に基づき、程度副詞「けっこう」の評価性が生じたメカニズムを詳

しく考察していく。

## 5.2 程度副詞「けっこう」の量的意味

森山（1985）では、程度副詞が純粹程度副詞と量的程度副詞に分類されている。「一ガ（程度副詞）アル」というパターンで表現でき、量的な概念も内包する程度副詞は「量的程度副詞」であるとされている。量的程度副詞に属するものは以下であるとしている。

量的程度副詞:かなり、随分、結構、やたら、なかなか、比較的、相当、大分、わりあい、  
少し、ちょっと、多少、少々、ある程度、いささか/もっと

（森山1985 下線筆者）

また、仁田（2002）は程度量の副詞の機能分担を図2のように表している。

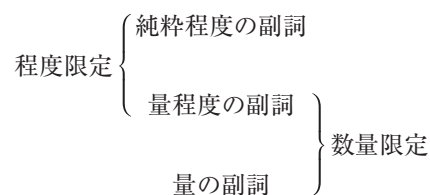


図2 程度量の副詞の機能分担

（仁田2002:164）

このうち、「量程度の副詞」の語例に「けっこう」が見られる。仁田（2002）は「けっこう」の量性も認めている。「量程度の副詞」とは、量と程度の両方で使用される副詞である。つまり、「けっこう」は程度を修飾する機能を持つだけでなく、数量限定用法も持つというのである。

28. 温情的な配慮がなされたりして解決することもけっこうあったのである。

（稲田雅洋『日本近代社会成立期の民衆運動』）

29. これを使っている人はけっこういるようです。（Yahoo!ブログ）

30. 写真の枚数はなんと千二百枚。編集にはけっこう時間がかかりました。（Yahoo!ブログ）

（「現代語書き言葉均衡コーパス・中納言」）

以上の三例では、「けっこう」は「ある」「いる」のような存在動詞や「時間がかかる」という表現やと結びつき、「解決する事件」「人数」「編集の所要時間」の量を修飾し、いずれ

も量が予想した以上の程度に達することを表している。量的含意を持つという点で、「けっこう」は形容詞に係ることができず、森山（1985）が主張するように、「一ガ（程度副詞）アル」という存在量叙述の構文に使用できる。

小林（2009）は、1980年代後半から2000年代までの小説、シナリオ、対談集、会話資料から200例を収集し、「けっこう」の程度限定と量限定を考察している。小林は、200例の中で、程度限定用法は129例、全体の64.5%を占めたが、数量限定用法は41例で、20%をやや上回る程度であり、「けっこう」の程度限定はよく使用されているという結論を出している。そして、プラス・マイナスを意味する形容詞との共起から見ると、「けっこう」は「うまい」のようなプラスを意味する形容詞と共起する例が多数を占める。それに対して、「ダメだ」のようなマイナスを意味する語と共起する例は7例のみである。このように、小林（2009）は後に共起できる形容詞のプラス・マイナスによって、「けっこう」はプラス評価の程度限定用法を有すると論述している。

### 5.3 量の大きさから程度の高さへ

鳴海（2013）が副詞は量的意味から程度的意味への発生過程を経たと主張したように、「けっこう」の程度的意味も量的意味と係りがあるだろう。現在、「けっこう」は程度副詞として使用され、抽象的な程度の高さを表すことが多い。以下のような例である。

31. これでも、君たちには、けっこういい研究材料だ。最初の実習としてはおあつらえ向きかもしれない。（安部公房『読書の時間に読む本』）
32. 患者さんの顔も処方もわかるようになり、患者さんとのコミュニケーションもけっこう楽しかった。（小菅もと子『忘れても、しあわせ』）
33. 問題は攻めだった。けっこう攻め込んでいたが、最後のツメがなかなかうまくいかなかった。（田中館哲彦『アタック！フューチャーズ』）
34. 長引きとお互い時間の無駄だし、それに疲れる。これがけっこう疲れるんだ。

（村上春樹『ダンス・ダンス・ダンス』）

（『現代語書き言葉均衡コーパス・中納言』）

31と32は形容詞の程度を修飾し、33と34は動詞の程度を修飾する例である。31は実習の研究材料となる内容が良質ということであり、32は愉快だった程度、33は攻めの程度、34は疲労の程度を限定している。いずれも、前の例28、29、30のような具体的な量の大きさではなく、抽象的に物の性質や動作の状態の程度の高さを表している。「けっこう」が量の大きさを限定できるからこそ、程度の高さを修飾できる。ただし、量の大きさを表す場合には存在動詞に係るのに対し、程度の高さを表す場合、形容詞（形容動詞を含む）にも係ることが修

飾できる。

#### 5.4 程度的意味から発生した評価性

本稿では、評価とは、話し手が自身の内面にある価値尺度や経験に基づき、事態や相手に対する品定めをすることと本稿では定義する。評価を表すとき、話し手の先入観の存在も暗示される。このため、いずれの場合でもすべての人が合意するような評価が出るわけではない。

程度副詞の評価性を最初に指摘したのは工藤（1983）である。工藤（1983）は、「程度副詞は、陳述的に肯定・平叙の叙法と関わって評価性をもちつつ、ことが然的には形容詞と組み合わさって程度限定性をもつ、という二重性格のものとして位置づけられる」（筆者下線）と指摘し、「けっこう」は主観的で評価性の濃いものであると主張している。

渡辺（1990）は、程度副詞を次の表示するように評価系と非評価系に二分し、「けっこう」を評価系に分類しており、単に程度の高さや量の大きさを表すだけでなく、物や事に対する評価を含むと考えている。「けっこう」は評価性があるが、プラス評価に偏る性質を持つとも述べている。

表 程度副詞の四種

	非評価系	評価系
発見系	とても類	<u>結構類</u>
比較系	もっと類	多少類

（下線筆者）

次に、「けっこう」の評価性と程度性の関連および評価性を帯びる「けっこう」がどのような場合で使われるのがふさわしいかを検討する。

前述のように、「けっこう」は①「十分満足ではないが、一応よい」、②「程度が予想より高い」という二つの意味を持っている。これらの意味は表面から見ると、事態や物事の程度を修飾するものであるが、実際にはそれだけではなく、事態や物事を認識した話者の消極的な気持ち、驚き・意外さを表している。「程度が予想したより高い」というのは、話者が実際の状態を見るまで、事態や物事の程度を低く見込んで、実際を見ると、先入観より程度が高くなるため、驚くことになったことを表している。以下の例を見よう。

35. 子供のころ、最初に西部劇とかサスペンス映画を見たときは、けっこう驚くものだ。

（松岡正剛『知の編集工学』）



36. 私はまず自分の本名を診断してみたが、これが結構当たっていることに驚いた。

(まいつねね『天職浪人』)

37. しかし、型は古いが、けっこう使いやすいものです。(Yahoo!ブログ)

(『現代語書き言葉均衡コーパス・中納言』)

35は映画を見たとき予想以上に驚いたこと、36は本名を診断する前には、それが当たるとは思っていなかったが、診断してみて、予想以上に当たっていること、37は型が古いから、十分満足ではないが、一応使えて、品質がいいことを表している。いずれも程度の高さや量の大きさを表すニュアンスは薄くなり、話者の驚きやプラス評価、程度を低く見込んだ割にはいいといった心理などを表している。

「けっこう」は一般的にいい評価を表現する語と共起しやすい。しかし、「検査の結果はけっこう悪かったですよ」などはいえる。すなわち、予想と反対する場合は、その予想が現実より高いという場合もある。つまり、話者に都合がいい予想（この場合、結果はそんなに悪くないという予想）より悪い場合には「けっこう」が使えてしまう。「低い見積もり」とは客観的な基準ではなく、その話者の「希望」としての「低い見積もり」ということになる。ここの例でいえば、「がんの進行はそんなに深刻ではない（悪くない）」という希望的予想を持っていたのに、診断の結果、予想以上に「悪かった」ということになる。程度が低い見込みがあるから、「けっこうきれい」といったら失礼なのではないということになる。きれいだと思っていたのに、「けっこう汚い」も失礼である。すなわち、もともときれいや汚いという予想をたてること自体は失礼であるし、その結果実際が違うことを評価することも失礼になる。この問題に関しては、さらに深い考察が必要であろう。稿を改め議論する。

相手にプラス評価を表す場合、「けっこう」を用いた断定的な評価の発話は、特に目上や年配の人、親しくない相手に対して使用すると危険である。従って、「けっこう」の使用には、場面や相手との人間関係への考慮も入れるべきである。一方、「けっこう」を使って、「十分満足であると言うほどではないが、一応よいと言えるさまをいう」場合には、自賛ではなく、「そんなに高く評価していなかった」という謙遜の気持ちを表す。

38. (ある留学生は先生の研究室に伺って、研究室の綺麗さと広さに引き付けられた)

先生：どうぞ。

学生：はい、失礼します。先生の研究室、けっこうきれいですね。

(筆者作例)

39. (辛い四川料理を食べている二人の話)

A：Bさんは辛さに強いですね。

B：まあまあです。四川省で大学生活を過ごしましたので、よく四川料理を食べま

した。だから、けっこう辛さに強いです。

(筆者作例)

38では、先生は目上の人であり、学生が先生の研究室のきれいさを褒める時、「けっこう」を使うのは適切ではないと考えられる。なぜなら、学生が先生の研究室はきれいではないという予想を持っており、研究室に入った時、そのきれいさを意外に感じたことが暗示されてしまうからである。自分の先入観で先生のことを低く評価したため、失礼な印象を与えると考えられる。また、39ではBは相手Aの評価に共感を示したいが、自分のことについての評価なので、謙遜する必要がある。それゆえ、この場合で、「けっこう」を使って自賛ではなく、「そんなに高く評価していなかったが、一応強い」という謙遜の気持ちを表している。

このように、程度副詞「けっこう」は単に程度の高さや量の大きさを表すだけではなく、事態に対する評価の意味も帯びる語である。「予想より程度が高い」という意味があり、話者の程度の低い見込みが暗示されているため、「けっこう」を使って相手のことを評価する場合、相手との人間関係を考慮しなければならない。特に、目上や年配の人、親しくない人に対して使用するのは適切ではない。

## 6 談話における「けっこう」の用法

渡辺(1991)は、「若い世代での「結構」の用法は、程度副詞ばなれの方向へ、それも大きく動いているようである。」と指摘している。そして注に「結構、彼がやったのかも知れない」という例を挙げて、「予想した以上のことだが気付いてみれば大いにあり得るといった気持ちを込めた、誘導副詞<sup>(3)</sup>になりきる」と説明している。つまり、文法的視点に立つと、現代語の「けっこう」は、程度副詞と誘導副詞の機能を兼ねているというのである。

渡辺(1990)では十分に分析されていなかった談話における「けっこう」の性質は、蓮沼(2001)では重要な課題として取り上げられている。蓮沼(2001)は、渡辺(1990)の見方を受け継ぎながら、実際の自然の談話データを分析したうえで、「けっこう」には、「程度副詞」、「誘導副詞」、「間投用法」という三つの副詞用法が存在することを確認している。

「程度副詞」と「誘導副詞」は文レベルで働き、「間投的な用法」は談話レベルで働くと指摘している。まず、「けっこう」の誘導副詞の機能および誘導副詞と程度副詞の関連性について、次のように述べている。

「けっこう」は、程度副詞としての意味を保ちつつ、句末・文末の主観的な表現と結びついて、「断言はできないけれど、大いにその可能性がある」「案外そんな気がする」といった、話し手の判断や、直感的な印象を述べる発言を誘導する、誘導副詞としての用法を確立しつつあると言ってよいと思う。

(中略) 程度副詞としての「けっこう」は、「低く見積もっていた予想よりも実際の程度が高いような事態や状況の発見を表す」ものだが、この場合、発見の対象となるのは、話し手にとって直接的に認識可能な現実の対象・状況である。これに対して、誘導用法は、話し手が間接的にしか知ることができない対象について、推定的な判断を述べる場合の用法である。

(蓮沼2001)

実際の生活の中で、テレビの生番組や実際の会話で、「けっこう」を使った表現をよく耳にする。多くの場合、「けっこう」を程度副詞や形容動詞として捉えただけでは十分に説明できない。実際の談話データで考察する<sup>(4)</sup>。

40. なんかー、あたしたちが入ってからぜんぜん来ないんじゃない↑。それまでけっこういたみたいだけど、バイトとか。(11G・女22)
41. 特に看板とかってけっこう、何か所かつけるうち、基本的にデザインって一緒になるじゃないですかー↑。(03A・男30代)
42. あー、そうですねー↑、サラダとかあ、そういうー野菜料理はあ、結構食べてるかも知れないしい (19B・女31)

(「女性のことば・男性のことば(職場編) 自然談話テキストデータCD-ROM」)

40から42までの「けっこう」は状態の程度、動作の量などを修飾する一方、「よね」「んだけど」「かもしれない」などを伴って、話し手の非断定的な判断を表すことに貢献していると考えられる。渡辺(1990)は、この種の機能は程度副詞離れの用法であり、現代の若者世代によく用いられていると述べている。蓮沼(2001)では、これは「けっこう」の誘導副詞用法であると説明されている。話し手は物事の評価をするとき、断言を避けるために、直接的に「けっこう」を使わず、文末に非断定的な表現をつけて評価を行う。なぜなら、程度副詞としての「けっこう」は「予想より実際の程度が高いようなことの発見を表す」ものであり、話し手の低い見積もりを暗示する働きを持っているため、「けっこう」を使うと、自分の意見を相手に押し付け、失礼で不愉快に感じさせ、相手との良好な人間関係を損なう恐れがあるからである。話し手は文末に主観的表現と結びつけて「けっこう」を使い、「断言ができないけれど、大いにその可能性がある」(蓮沼2001:288)といった判断や気持ちを述べる。

蓮沼(2001)はまた、間投用法という「けっこう」の使い方に関して指摘している。間投用法とは、言いよどみや間つなぎに「けっこう」が使用される場合であると指摘している。談話において、以下のような「けっこう」が使用される例が見られる。

43. 全部、全部自分でやんなきゃいけな、久し振りだったからさ、けっこう、なんか、とまどっちゃった。(02A・女27)
44. うーん、けっこうやっぱこっちの冬場は一、あの、天気悪いと、長袖じゃないと寒いよね。(02A・女27)
45. けっこうまあ、安くできたってゆうこともあるんで、よけいなこと★ゆったんだけど。(05A・女41)

(同上)

以上の3例では、「けっこう」は「なんか」「あの」「まあ」などの、程度性を欠く感動詞と共起しているため、程度副詞や誘導副詞の機能は認められない。ここでの「けっこう」は言いよどみや間つなぎに使用され、副詞の働きが希薄化してきているといえよう。蓮沼(2001)は、このような「けっこう」は間投用法に偏っていると指摘し、日常生活の中ではこのような「けっこう」の程度副詞以外の用法がよく使われるとしている。

これらの用法は日本語の辞書にも中国語の辞書にも載っておらず、母語話者にとっても気づかれにくいだが、学習者にとっては認識が難しい。「けっこう」のこのような意味機能の多様性についての研究は十分とはいいがたく、今後詳しく検討していくべきであると考えられる。

## 7 おわりに

本稿は、先行研究を整理した上、「けっこう」の意味変化と各品詞の繋がりを考察した。また、現代語における「けっこう」の形容動詞用法と程度副詞用法に現れる評価性、および程度副詞以外の用法について検討した。「けっこう」は当初中国語の“结构”という漢語から伝来してきた。日本語に受容された後、名詞として使用され、漢語「結構」と表記された。この名詞用法は近世まで続いたが、中国文献に見られない「計画、意図」という新しい意味が発生し、意味が拡張したといわれている。時代が下るとともに、形容動詞と程度副詞の用法が出現してきた。形容動詞「けっこう」にはすばらしいという意味と断り表現の用法がある。この二つの意味は一線の中にあるのではなく、断りを意味する用法は「すばらしい、満足である」といういい意味から発生したものである。近世に至ってから、「けっこう」の程度副詞用法が出てくる。鳴海(2013)の副詞一般について述べたように、「けっこう」についても「量的限定」→「程度的限定」→「評価性」というような変化の道筋を辿ったことは明らかにした。程度副詞「けっこう」はものの多さと様態や動作の程度の高さを表すと同時に、程度が予想した以上に高い、驚きや意外のニュアンスを暗示するため、評価的意味が潜んでいる。話し手自身のことを評価する場合には、評価性を帯びる「けっこう」を使うと、謙遜の気持ちを込めている。しかし、聞き手に対してプラス評価をする場合、「けっこう」

の使いは失礼な印象を与える。したがって、評価性を帯びる「けっこう」の使用には注意すべきである。最後に、現代語において、実際の談話の中では、「けっこう」には誘導副詞と間投用法がある。誘導副詞の場合、話し手の断言を避けるために、文末に「らしい」「かもしれない」「んじゃないですか」などの非断定表現を誘導している。間投用法の場合、「けっこう」の具体的な意味は希薄化して、いいよどみや間つなぎに使用されている。

今後は、「けっこう」以外の評価性を持つ程度副詞の使用状況を、データを用いて詳しく分析し考察していく。そして、最終的には評価性を持つ程度副詞の全容解明を目指していく。

## 注

- (1) 程度副詞「けっこう」の表記に関しては、「けっこう」は平仮名で統一して使用する。しかし、引用文献などにおいて、著者が「結構」を表記している場合には、原著に倣いそのまま使用する。
- (2) 『日本国語大辞典 第二版』(2000)では、(一)の意味は「結構」の名詞用法を指す。
- (3) ここでの「結構」は文末の「かも知れない」という主観的表現と結びつき、話し手の非断定的な判断を誘導する誘導副詞になっている。
- (4) 談話のデータは『女性のことば・男性のことば(職場編) 自然談話テキストデータCD-ROM』から抽出されたものである。例文の表記、および()内の記号は次のことを意味する。  
↑:上昇調 一:語尾を長音にする(01A・女28) :話者の仮名・話者の性別と年齢

## 参考文献

- 遠藤好英(1983)「けっこう」佐藤喜代治編『講座日本語の語彙・語誌Ⅱ』PP.24-30 明治書院
- 工藤浩(1983)「程度副詞をめぐって」渡辺実編『副用語の研究』PP.176-198 明治書院
- 小林玲子(2009)「量程度の副詞における主観性—「けっこう」を中心として—」『日本語教育連絡会議論文集』Vol.21 PP.51-60 日本語教育連絡会議事務局
- 佐野真一郎(2012)「「やばい」の変化を分析する」日比谷潤子編『はじめて学ぶ社会言語学:ことばのバリエーションを考える』第11章 ミネルヴァ書房
- 佐野真一郎(2012)「「全然」の変化を分析する」日比谷潤子編『はじめて学ぶ社会言語学:ことばのバリエーションを考える』第12章 ミネルヴァ書房
- 辞海編集委員会(2010)『辞海』上海辞書出版社
- 田和真紀子(2011)「程度副詞の評価性をめぐって」『大学教育学部紀要』第61号 PP.25-36 宇都宮大学
- 中国社会科学院语言研究所词典编辑室(2012)『现代汉语词典 第六版』商务印书馆
- 鳴海伸一(2012)「程度的意味・評価的意味の発生—漢語『随分』の受容と変容を例として—」『日

- 本語の研究』第8巻1号 PP.60 (16) -45 (31) 日本語学会
- 鳴海伸一 (2013) 「副詞における程度的意味発生の過程の類型」『国立国語研究所論集』6 PP.93-110  
国立国語研究所
- 仁田義雄 (2002) 『副詞的表現の諸相』くろしお出版
- 日本国語大辞典第二版編集委員会 (2000) 『日本国語大辞典』小学館
- 蓮沼昭子 (2001) 「談話における「けっこう」について」『日本語の伝統と現代』PP.279-293  
和泉書院
- 林奈緒子 (1996) 「意味素性による程度副詞の記述」『筑波応用言語学研究』(3) PP.13-25 筑波大  
学大学院博士課程文芸・言語研究科応用言語学コース
- 播磨桂子 (2014) 「「結構」の応答用法出現時期における使用状況」『梅光学院大学論集』47 PP.11-  
27 梅光学院大学
- 前田富祺 (1983) 「漢語副詞の種々相」渡辺実編 『副用語の研究』PP.360-376 明治書院
- 森山卓郎 (1985) 「程度副詞と動詞句」『京都教育大学紀要 人文・社会』66号 PP.60-65 京都教育大  
学
- 渡辺実 (1990) 「程度副詞の体系」『上智大学国文学論集』(23) PP.1-16 上智大学

# 「けっこう」<sup>(1)</sup>的语义功能的多样性 ——从汉语「結構」的变化——

张 琳

## 摘要

古代日语从中国吸收了大量的汉语词汇。这些汉语词汇传入日本后，语义和用法随着日语体系的不断变化而变化，最终在日语中固定下来。因此，日语中的多数汉语词汇保持了中文的原意。但是，由于有些新出的用法在现代语词典里没有进行整理和记载，所以在日常生活中，很多词汇在使用时，无法明确地判断其具体的语义和用法。「結構」（「けっこう」）就是这类词汇中的一个。

本文作为对日语「けっこう」的语义，用法，谈话中的功能以及语用功能的研究的准备阶段，旨在对相关文献进行整理。虽然是以现代语「けっこう」作为分析对象，但是根据需要，也会用到古典文献和语料库进行研究。

关键词： 程度副词「けっこう」语义功能 多样性 变化 评价性语义